

ISSN 0387-5423

国文学研究資料館編

国文学年鑑

昭和55年

BIBLIOGRAPHY OF RESEARCH
IN
JAPANESE LITERATURE

1980

March 1982

The National Institute of Japanese Literature

昭和55年

— 国 文 学 年 鑑 —

昭和五十七年三月二十日 印刷
昭和五十七年三月二十五日 発行

編者

国文学研究資料館

東京都品川区豊町二丁目一〇

電話七八五―七三二

発行所

東京都新宿区西早稲田

二丁目三第一山武ビル

株式会社 至文堂

電話 東京(二〇八)二三五一

振替口座東京七一五五〇七番

凡 例

一、この年鑑は、昭和五十五年一月から十二月までの一年間に発表された国文学関係の研究文献の目録と一年間の国文学界の動向を示す資料等を収めたものである。

一、本書は、学界展望・雑誌紀要論文目録(付新聞所載論文目録)・単行本解説・学界消息の四部から成る。なお特集号一覧・収載雑誌紀要一覧・単行本書名一覧・翻刻複製作品一覧・発行所一覧を添え、巻末に雑誌紀要論文目録と単行本解説の部の執筆者索引を附した。

一、学界展望は、上代・中古・中世・近世・近代の五分野に、国語学・国語教育の二分野を加え、それぞれの専門家に御執筆願った。

一、雑誌紀要論文目録は、論文をその内容により、目次のごとき項目に分類し配列した。その際、次のような方針を採った。
原則として、一般的な題目より順次特殊の題目に及ぶように配列した。

翻刻・座談会等は原題にかかわらずその旨を()内に注記した。

同名の雑誌紀要を区別するため、場合によっては()内に発行機関の略称を入れた。

論文題目・執筆者・雑誌紀要名・発行月・巻号・ページ数(概数)の順に記載した。

〔記載例〕

(論文題目)		(執筆者)		(雑誌紀要名)		(発行月)		(巻号)		(ページ数)	
文学概念について		杉本 令美		国語教育研究		11		二一上		10	
—西尾実と加藤周一の場合—											
文学起源説の史的変遷		星野 五彦		群馬女子短期大学紀要		6		セ		6	

一、新聞所載論文目録は、日刊十二紙、図書関係三紙から、国文学関係で署名のあるもののみを採録した。

配列は、論文名、執筆者名、掲載日、紙名の順である。

紙名は略号を用い、「北海」は北海道新聞、「日経」は日本経済新聞、「西日」は西日本新聞、「図書」は図書新聞、「日読」は

日本説書新聞をそれぞれ示す。

- 一、単行本解説は、雑誌紀要論文目録とはほぼ同様の組織から成る。解説は内容の簡潔な説明を主とし、発行月日・判型・ページ数・価格・発行所を附記した。

- 二、学界消息は、①学会一覽、②学会研究発表一覽、③新指定文化財目録（抄）、④科学研究費等交付一覽（抄）、⑤受賞一覽、⑥計報を掲載した。

①学会一覽は主要な学会を、五十音順に配列し収めた。

②学会研究発表一覽は主要な学会で行われた研究発表・公開講演・シンポジウムの題目及び氏名を掲げたもので、開催日時順に配列した。

③新指定文化財目録（抄）は、新指定の文化財のうち、国文学に関係のあるものを主として収録した。

④科学研究費等交付一覽は、昭和55年度文部省科学研究費補助金を交付されたもののうち国文学に関する分（国語学、国語教育を含む）を抄出した。

⑤受賞一覽は国文学に関係あるものに限定し収録した。

⑥計報は昭和五十五年に逝去された方々について略歴・没年等を掲げ氏名の五十音順に配列した。

- 一、特集号一覽・収載雑誌紀要一覽・単行本書名一覽・翻刻複製作品一覽・発行所一覽・執筆者索引等は、すべて五十音順に配列した。なお収載雑誌紀要一覽には、昭和五十七年一月末日の時点で当館に所蔵されていない雑誌名に＊を付した。たゞ、今後とも雑誌収集の努力を払い、未所蔵本を少くする方針である。

- 二、本書は、国文学研究資料館所在の資料を中心とし、それ以外にも気づいたものを可能な限り収載するように努めた。

なお、本書の作製に当たっては、多くの方々の御支援を受けたが、特に文献目録に関しては国文学研究文献目録委員会を設け、浅井清・大矢武師・久保田淳・小島孝之・篠原昭二・杉本邦子・曾倉岑・浜野卓也・山口明穂の諸氏に御参加願ひ、御協力を得た。又、編集作業は当館研究情報部編集室が行った。

目次

学界展望

上代文学	桜井 満……………三	中古文学	片桐 洋一……………九
中世文学	伊藤 正義……………一五	近世文学	小笠原恭子……………三
近代文学	榎本 隆司……………六	国語学	加藤 正信……………三
国語教育	大平 浩哉……………完		

雑誌紀要論文目録

国文学一般……………	完
文学論・国文学論 古典文学 比較文学 和歌 俳諧 歌謡 説話・昔話 芸能 民俗 沖縄文学 国語（一般及び雑 音声・音韻・アクセント 文字・表記 語彙 文法 文体・文章 方言 言語生活 辞書・資料）	
上代文学……………	七〇
一般 神話 古事記・日本書紀 祝詞・宣命 風土記 歌謡 万葉集 漢文学 国語	
中古文学……………	八三
一般 漢文学 和歌 歌謡 物語 歴史物語 説話 軍記 日記・随筆 国語	
中世文学……………	一〇七
一般 和歌 歌謡 軍記物語 説話 小説 歴史物語 日記・紀行・随筆 仏教文学 唱導・縁起 キリシタン文学 演劇 国語	
近世文学……………	一三〇
一般 国学 和歌・和文 儒学・漢文学 俳諧 川柳・狂歌 小説 演劇 芸能 国語	
近代文学……………	一五二
一般 近代詩 短歌 俳句 小説 大衆文学 児童文学 評論 演劇 国語	

国語教育.....二〇

一般 聞く・話す 読解・読書 作文 ことば 古典（古文・漢文） 書写.....二三

書評・紹介 目録・その他

新聞所載論文目録.....二四

特集号一覧.....二五

収載雑誌紀要一覧.....二七

単行本解説

一般及び雑.....二九

上代文学.....三三

中古文学.....三三

中世文学.....三七

近世文学.....三〇

近代文学.....三七

国語教育.....四七

単行本書名一覧.....四三

翻刻複製作品一覧.....四四

発行所一覧.....四六

学界消息

学会一覽	四六三
------	-----

学会研究発表一覽	四七〇
----------	-----

新指定文化財目錄	四六六
----------	-----

科学研究費等交付一覽	四六七
------------	-----

受賞一覽	四九二
------	-----

計報	四九三
----	-----

執筆者索引	五〇〇
-------	-----

昭和五十四年国文学年鑑補訂	五三三
---------------	-----

学
界
展
望

上代文学

桜井 満

はじめに

昭和五十五年の上代文学に関する学界を見渡して、最大の喜びは三谷栄一氏の『古事記成立の研究——後宮と神祇官の文学』（七月、有精堂）がまとめられたことであろう。そして最大の悲しみは大久保正氏を失ったことである。大久保氏は『万葉集の諸相』（四月、明治書院）をおまとめになり、還暦記念の論文集『万葉とその伝統』（六月、桜楓社）が刊行されたばかりで、まことに思いがけないことであつた。

学界の動向は、学会活動の沈滞をよそに、研究の視点や方法、発表の機関や形式など、まことに多様なものがあつて、個人の力ではなかなかおさえきれないところがある。学界展望とは何か、ということを考えれば考えるほど、事は重大であり、いろいろな立場の研究者の座談形式による展望が考えられなければならない時ではないかと思う。学界展望は、この一年間に発表された研究書や論文を細大漏らさず精読して紹介し論評すればよいというものではないであらう。この年の学界を展望するということは、学界の未来を展望することにつながるなければならないはずである。

たとえば、とても研究とはいえないものが、「——研究」とか「——論集」などと自称する機関誌に多かつたりする。題目にひかれて読むとほんの思いつきだつたり、先学の研究を無視したものだつたりするのだ。それが大学院生の点数稼ぎであつたりすると、その安易な態度が将来どういう結果をもたらすのか案じられてならない。問題意識もはつきりせず、ただ書きさえすればよいという饒舌なものは、大学の紀要類にも目立つ。意味のないことである。こうした嘆きはきりなくあるが、前向にこの一年間の学界を展望してみても、やはり着実な稔りがあつたと思う。極度に細分化された研究に對する反省はすでにおこつており、それが巨視的、体系的な綜合とともに新たな方法論の開発に向つてゐる。八〇年代（という言い方は好まないが——）の上代文学研究の方向を豊かにするような動向もあるのだ。

一、古事記研究

さて、三谷氏の『古事記成立の研究——後宮と神祇官の文学』を手にしたことを最大の喜びとするのは、著者二十余年にわたる各論の集成

でありながら、これを改稿し、改編し、補筆し、さらに新稿を成して、体系的に総合的に現在の著者の古事記の成立論が展開され、それが『古事記』とは何か、を考える上に、きわめて重大な学説だからである。その「はしがき」の冒頭に、〈本書は、筆者が長い間提唱しつつけて来た「稗田阿礼女性説」と「古事記後宮伝承説」とを更に発展させて、『古事記』は持統・元明兩女帝の後宮伝承と神祇官の官人たちの協力によるものという推論を提示し、『日本書紀』は太政官側の編纂になるものと断じたものである〉という。これが本書を貫く主張である。

稗田阿礼女性説は、平田篤胤以来説かれるところである。記序に阿礼は「誦習」者であるという。その誦習の意味や内容を検討し、古事記成立の問題に及ぶ。古事記の撰録者として太安万侶が存在するが、そのものになるものが後宮伝承であるとしたら、成立に大きくかわることになる。阿礼は記序に「舎人」であるという。令制の舎人は明らかに男官であるが、古事記そのものに女性の立場の伝承が認められるのである。三谷氏の阿礼女性説に真っ向から対立した西田長男氏が亡くなり、阿礼の性別論争が展開される兆しはない。おそらく永遠に結着をみない問題なのであろうが、阿礼男性説側からの反論によって、古事記の成立論は確実に深められるであろう。令制の舎人は男性であるに違いないが、誦習者阿礼の立場と撰録者安万侶の立場を思うと、阿礼を「舎人」とすることに疑問の目を向けてみたくなるのである。

阿礼女性説は、古事記後宮伝承論と深くかわかる。そして古事記の後宮伝承論は、万葉集の成立論にも本質的な影響を及ぼしているのであった。そしてまた、日本書紀の神が太政官的であるに對し

て、古事記の神は神祇官的であることは、後宮伝承との交渉の深さを物語る。古事記から万葉集へ、万葉集から『続万葉集』すなわち古今和歌集をはじめとして、歌物語や物語・日記・隨筆など、後期王朝の文学へという流れがある。日本書紀や風土記の成立とは本質的に異なること明らかであり、古事記が神祇官的世界の産物であることは、菅野雅雄氏も関心を示しているところであって、今後の成立論への展開が期待される。

なお、守屋俊彦氏の『古事記研究』（十月、三弥井書店）がまとめられた。文学性豊かな中巻・下巻の物語を取りあげ、その物語の下に、神話や神話的なものを探って来られた一連の既発表論文に、〈山代の歌と丸邇氏〉〈御諸のその高城なる〉（六〇）の歌をめぐっての二篇を添えたものである。神話と物語、さらには宗教と文学の問題で、伝承の祖形を成す氏族の神話が、神と人との別れによって文学になることを説いている。石上七輔氏の『古代伝承文芸序説』（八月、桜楓社）も、文学の発生と伝承とに注目し、叱尿・族霊・大嘗祭などを通して、古代人の内面を追求しているが、文学史としての方法が考えられなければならないであろう。

さて、古事記についても一書あげなければならない。それは倉野憲司氏『古事記全註釈』の「第七卷下巻篇」（十二月、三省堂）が刊行されたことである。七年八月月にわたる全七卷、二千四百余頁に及ぶ全註釈が完成した。この全註釈を「昭和の新古事記伝」たらしめようと意図した著者は、へまず何よりも『古事記伝』を最も尊重して註釈の基礎とした。『古事記伝』のお蔭で今日われわれは古事記が読めるのであり、その研究も進めることができるやうになったのである。この事を忘れてはならない。それで私は記伝の説を出

来るだけ引用してその是非を批判し、然る後に自説を述べることにした（凡例）と述べている。まことに古事記注釈の出発点はここにあるだろうと思う。私はかねがね「古事記伝」中の玉石を選り分けるだけでも大きな意義のあることと思っていた。

先学の研究を顧慮せず、あるいは故意に避けて通ろうとし、あるいは新しい用語を以て新解釈とするような傾向があるなかで、われわれは、本書を前にして、上代の古典を読むことのできる幸せを考えなければならぬであろう。

昭和五十四年度「古事記年報」（二二）が十論文と研究年表（昭和五十三年度）ほかを収めて五十五年一月に発行された。古賀精一氏「古事記の文章」、中村啓信氏「タカミムスヒの神格」、秋本吉徳氏「口承の世界へ——オボチ・ススチ・マヂチ・ウルチ——」、尾崎知光氏「古事記」下巻の構成についての「問題——雄略物語の想定とその意味——」、川副武胤氏「神祇史」二題——神祇觀念と神社・事代主神の創祀について——など、濃のある論といえよう。

なお、「文学」が四月号、五月号に、「古事記の時代Ⅰ」「同Ⅱ」を特集している。文学ばかりでなく、歴史・考古・神話・言語など関連諸学あげての有益な論が多い。巻頭に収められた益田勝実氏司会による直木孝次郎・森浩一・上原和四氏の座談会「古事記の時代」は、古事記が編まれた時代について、歴史学・考古学・美術史それぞれの分野の最新の研究動向が語り合われており、参考にするべきところが多い。また上田正昭氏「古事記の神々——大年神の系譜を中心として——」は、西田長男氏が古事記偽書説の有力な論拠の一つとした大年神の系譜・曾富理神について、歴史学の立場から検討し、平安初期成立説を批判している。

二、万葉集研究

当年もまた万葉集に関する著者・論文の発表はおびただしい数にのぼる。まずあげるべきは、五味智英・小島憲之両氏の編む『万葉集研究』第九集（十一月、塙書房）であろう。伊藤博氏「万葉集の配列方法——問答歌をめぐって——」、土橋寛氏「民謡と創作歌の間」、山崎馨氏「四つの船——古代外交裏面史の哀歌——」、中西進氏「万葉集の自然——言語としての自然（四）——」、稲岡耕二氏「人麻呂歌集略体歌の方法（三）——わたりの詞とその性格——」、伊原昭氏「天武天皇のある一面」、村山出氏「志貴親王挽歌論——その成立と背景をめぐって——」、尾崎暢映氏「もののふの文学——大伴宿禰家持——」の八篇を集めて壮観である。現在の最も高い水準の研究成果が示されている。伊藤氏の論は、出典未詳（作者未詳）の歌を多数収める巻七・十・十一・十二・十三・十四の歌の配列方法に関する一連の考察で、ここでは問答歌をとりあげている。完全な万葉集のための実証で、その完成が大いに期待されるのである。中西氏の論は「古事記抄」とともに、稲岡氏の論は人麻呂論の一環として、それぞれまた一連のもので、三氏ともに万葉集の本質にかかわる問題をじっくり見据えており、その着実な成果は、研究の指標となるものであろう。

次に数十冊の研究書のなかからまず大久保正氏の『万葉集の諸相』（四月、明治書院）をあげよう。（本書は、『万葉の伝統』（昭和三十一年、塙書房刊）に次ぐ、著者の万葉集に関する研究論集で、昭和三十一年以降、諸書に発表して来た論考の中から万葉集一般にわたるものを選んで加筆し、新稿一篇を加えて編成したものである）（あとがき）という。万葉集の前史から、名義・歌体・作家・素材

と景物・表現、そして伝来と享受に至る全七章から成る。まさに万葉の諸相であるが、それは万葉集の本質にかかわる諸問題と研究史から成る総合的な研究としての体裁を成している。これだけ広範な研究領域を持ち、その上忠実に先学の考察の跡を確認し、厳正な批判を加えながら採るべき説は採って、論を進めて行く手堅い態度はみごとである。本書に収められた新稿一篇は、「短歌の成立」である。短歌の源流が民謡にあるという説を是とし、短歌形式成立の具体的な道筋を歌謡を文字に記載する際の整理であり、創造であったと説いている。吉本隆明氏の「歌謡が音声で歌い出された〔初期〕をかんがえると、音声律と、書きとめられた音数律とは、一致しなかったはずだ。宣長の強調とは逆な方向で、音数律では四音数と六音数でしか書かれない詩句も、音声としては、五音数と同じ時間で歌われた可能性がありうる」(『初期歌謡論』)という発言に示唆を受けていたのであった。大久保氏は、短歌の民謡源流説を具体的に説いた土橋寛氏の古稀記念論文集『日本古代論集』(後出)に、「短歌の発生をめぐって」の論を寄せているが、「短歌の成立」からの大きな発展はみられない。

なお、広い視野で万葉びとの言葉と思考の世界を説く佐竹昭広氏『万葉集抜書』(五月、岩波書店)、山部赤人を中心とする後期宮廷歌人の人と作品を説く清水克彦氏『万葉論集第二』(五月、桜楓社)は、すでに学界の評価を得ている既発表論文だけを集めたものであるが、あらためて味読すべき好著である。

次に、同じく既発表論文の集成であるが、小野寛氏の『大伴家持研究』(三月、笠間書院)をあげる。本書は、家持の体系的な研究として高い完成度を持っている。「あとがき」に、「既発表の論文をた

だ集めて、それらしく配列して、何々の研究と麗々しく銘打って刊行することを、私はひたすら忌避して来た」という。まことに同感である。(それを私はしてしまった)といわれるが、本書に収める昭和四十三年から十二年間に発表された二十三篇の論考は、生歌・ことばの三部を構成している。家持の生涯を追ひ、作品の本質を論じ、用語の考察を通して、家持の世界を明らかにしようとする手堅い方法がうかがえる。各論の多くがきわめて重厚で確かな論を形成しており、近年、大著が相次ぐ家持研究に、新たな出発点を与える確かさがあるといえよう。

また、桜井満の『柿本人麻呂論』(六月、桜楓社)は、伝来の作歌と史学の成果をふまえた民俗学的立場からの人麻呂論で、人麻呂宮廷伶人説を主張している。既発表論文を整え、全国二百五十を超える人麻呂関係社一覽を添えた。

さて、学会誌は、「万葉」が第百三号、第百四号、第百五号の三冊に、稻岡耕二氏「石見相聞歌と人麻呂伝——作品論による伝記の再検討——」ほか十篇、「上代文学」が第四十四号、第四十五号の二冊に、小島憲之氏「万葉題詞のことば——「夜裏」「留女」考——」ほか十篇を掲げている。そして「美夫君志」は第二十四号に、梶川信行氏「志貴親王挽歌論序説——親王薨時と挽歌制作時と——」ほか五篇を収める。

各誌それぞれ独自の立場を確立している研究者に伍して、毛利正守氏「万葉集・旋頭歌の字余り」(『万葉』第百四号)、西田悦子氏「万葉集短歌の定型の問題——第一句不足音句の訓について——」(同、百五号)、辰巳正明氏「家持の越中賦」(『上代文学』第四十四号)、中村昭氏「万葉集の数仮名」(同、四十五号)、清原和義氏「久慈川は幸くあり待て——防人歌の風土——」(同上)、そして梶川氏の論など、注目すべき論考

を収めているが、概して鋭敏の論は少ない。

なお、「古代文学」は第十九号が発行され、研究の少ない日本靈異記を特集し、意欲的な論を集めている。ほかに靈異記関係の論は、土橋氏の記念論文集に、黒沢幸三氏の「日本靈異記小論——行基説話の意味するもの——」がある。神々の後退に伴う神話の衰微の中で、行基説話の発生を見据えた好論である。

また、「古代学研究」第九十四号（二〇月、古代学研究会）が「万葉集と考古学」を特集している。林博通氏の宮地は錦織地域という「近江大津宮」以下三十四篇が六十四頁の雑誌に収録されており、どれも掌篇であるが、万葉の歌に直接かかわる問題が多く、歌の正しい理解のために注目しなければならない。網干善教氏「飛鳥浄御原宮造営の歌」は、宮地によって歌の解釈が動くことを、浄御原宮が従来「飛鳥板蓋宮伝承地」として発掘調査している地域の可能性があることを述べながら注意している。この地域は、年が明けて二月に、飛鳥京跡第七十八次調査現地説明会によって、東西五間、南北二間という大型の門状遺構が確認され、七世紀代に造営されたはずれかの宮跡であることが公にされたところである。まだ木簡などの確かな物証はないが、浄御原宮の跡ではないか、と注目されている。書紀によると、浄御原宮は岡本宮の南に造営され、壬申の乱の数ヶ月後の冬には岡本宮から遷っている。岡本宮が確定しなければわからないことであるが、もし通説のように雷岡のほとりにあったとすると、その南には壮大な飛鳥寺の伽藍があったことになる。その南を岡本宮の南と表現するかどうか。そうすると岡本宮も飛鳥寺の南にあったのか。また四、五ヶ月にして大型の門を構えた宮殿の造営が可能なものかどうか。私には疑問が残るが、万葉の歌の正し

い解釈が考古学の成果と手を結ぶことになるのであって、近年のめざましい考古学の成果に目を向けながら、歌のよみを深めなければならないであろう。また、森浩一氏「磐代と有間皇子」は、有間皇子の変に連坐して藤白の坂で斬られた塩屋連鯛魚は、塩屋の地名を伝える和歌山県御坊市の日高川河口一帯を勢力下とする豪族の出であるかと推定し、御坊市岩内の県下有数の終末期古墳「岩内（二号）古墳」の被葬者として有間皇子を推定している。また磐代における祭祀の候補地を考古学的に示せることの可能性も示されていて興味深い。ほかに寺村光晴氏「沼名河之底奈流玉」は、新潟県糸魚川市の旧沼川郷を中心にした硬玉（翡翠）の玉作遺跡の発掘調査を通して、沼名河の表現は糸魚川市の田海川の古名によるという年来の主張が要約されている。見過ごし得ない発言であるはずだ。

考古学の側からの〈万葉考古学〉の提唱は、樋口清之氏によってすでに昭和二十七年にみられるものである。近年の考古学は江戸時代のものにまでその検証を進めるようになった。今こそ万葉と共に掘りさげる考古学の領域が確立されることを期待したい。

三、発 生 論

文学研究の方法、とりわけ発生論に関する試みがさかんである。藤井貞和氏や古橋信孝氏の沖縄の伝承を見据えた発言には確かなものが感じられるようになった。

「国文学解釈と教材の研究」十一月号が「記紀万葉の謎」を特集し、その巻頭に、こうした新しい方法を自覚させた吉本隆明・藤井貞和両氏による「歌謡の発生をめぐって」の対談がある。折口信夫の古代研究の方法に啓発されて、記紀歌謡の前に南島歌謡を置いてみよ

うという問題意識が語られている。そして「国文学解釈と鑑賞」は、二月月号に「響きあう古代——古代歌謡と万葉」、十二月月号に「神語り・昔語りの世界」を特集して、「神謡」とか「神語り」とかいう用語を立てての論が展開されている。「神謡」の語には、すでに「神謡」といって通用している概念があり、「神語り」には、古事記に「神謡」という歌謡、日本書紀には巫覡の伝える「神謡」がある。文字化された記紀神話以前の生きた口承神話を対象化しようという試みは大賛成であるが、謡と語りの未分化状態を「神謡（神語り）」と呼ぶのは落着かない。発想の転換をはかって文学の始源を明らかにし、新しい文学史を目ざそうとする意欲は大いに評価したい。折口信夫の方法を批判することによって自分のものを出そうという意欲もわかる。ただ「新しい」ことを強調して、多彩な研究史への目配りが充分でないところがあってはならないであろう。

古代文学会が、学会の集団的研究の成果として、共同討論の過程を通してながら編んできた論集が『文学の誕生』『想像力と様式』と続いたあと、今年は『伝承と変容』（二月、武蔵野書院）が刊行された。新たな方法論が模索され、その成果が着実に実を結んできたといつてよいであろう。新たな文学史の方法の行方を見守りたい。

ちょうど故宮良当壮氏の二十二巻に及ぶ全集の刊行がはじまった（第一書房）。第一回配本は第七巻「探訪南島語彙稿」（二月）で、続いて第十二巻「沖繩の人形芝居 芸能・文学論考 沖繩文学資料篇」（五月）、第十一巻「八重山古謡 歌謡論考」（八月）、第八巻「八重山語彙（甲篇）」（十二月）と、四百頁から八百頁に及ぶ大冊が順調に配本されている。「探訪南島語彙稿」は、学生時代に謄写版刷の自家製で五十部だけ出版したのが初版であって、柳田国男をして

「今でも私は成城の私の書庫の中で光を放つてゐるのはこの本だけだといつてゐる……」（『故郷七十年』）といわしめた超労作である。

「八重山語彙」もまた同様の労作で、八重山語を標準語で訳注した甲篇に続いて、標準語に八重山語を類別してあげた乙篇も出る。文学の方法論や発生論のうえに、南島が今日ほど多くの人々の関心を集めたことはない。ほとんど入手不可能であった南島調査の基本資料と研究文献とが、こうして次つぎに提供されることを喜びたい。

む す び

学界では、竹内金治郎氏が傘寿を迎え、年来の研究を『万葉東歌私攷』（五月、桜楓社）としてまとめ、大養孝氏と土橋寛氏の古稀を記念した論文集が編まれた。大養氏のもものは『万葉・その後』（五月、塙書房）で、青木生子氏「人麻呂における「いにしへ」——み熊野相聞歌をめぐる——」、伊藤博氏「万葉歌の配列——人麻呂集「春雜歌」をめぐる——」、稲岡耕二氏「人麻呂歌集旋頭歌の文学史的意義」など、万葉関係は十四篇を収める。土橋氏のもものは上田正昭・南波浩両氏編『日本古代論集』（九月、笠間書院）で、ウケヒは真実を知るト占のための言語呪術であるという土橋氏の「ウケヒ考」をはじめ、松前健氏「神婚説話と英雄譚の範型」、吉井敏氏「遺新羅使人歌群——その成立の過程——」、伊藤博氏「正述心緒の配列——女」の歌と「男」の歌——」など上代文学関係は十四篇を収める。共に学界の先達の質にふさわしい意欲的な論が多く、学界の将来は決して暗くない。稲垣富夫氏『万葉能——研究と創作——』（三月、中部日本教育文化会）のように、万葉の深い理解が示された創作もあって楽しい。

前にふれた「記紀万葉の謎」は、記紀万葉について近年論じられている問題を取りあげている。謎はなかなか解ききれないものである。研究が極度に細分化されて、問題の本質を見失いそうになってきて出発点に立ち戻り、何ぞと問ひ直すことになるのであろう。学界はそうした意味では反省期に入っているのである。それが学会活動の低調さを一っそうひどいものにしてしているとみてよからう。万葉学会は昭和二十六年に、上代文学会は翌二十七年に発足している

中古文学

一

「思えば、我々の学生時代は幸せな時代であった。新しく発表される平安時代文学関係の研究論文のほとんどすべてを読み、自分なりの追跡的検討と発展的思考を試み得るほどの情報量しかなかったのだから……」とは、最近書いた、ある論文の書き出しであるが、考えてみれば、昭和五十五年の中古文学の研究状況を概観しようとする本稿の冒頭に位置させる方が、より適切であったようである。じつさい、昭和五十五年の中古文学関係の著書・論文の類を国文学研究資料館研究情報部から与えられた仮目録によって数えてみる

からもう三十年になる。特に上代文学会は、万葉研究の広い分野の研究者の連絡をはかる全国的な組織として発足したのであった。発足当初の目的は、創立十五周年記念に「万葉集研究論文目録」を編んだあたりで終っているといってもよい。国文学研究資料館も機能しだした。研究者と機関誌とがむやみに増え続けている現状のなかで、全国的な組織の学会の役割は何か、考え直すべき時ではなからうか。

片桐洋一

と、著書もしくはそれに類するものが一〇五冊、論文もしくはそれに類するものが七一七点に及ぶ。経済的な面を度外視しても、一年間に一人が読み得る量をはるかに超えている。

中古文学全体の場合だけでなく、「源氏物語」関係に限って見ても、たとえば室町時代に偽作された「紫日記」について論じた植田和枝氏「紫日記——その紹介と位置づけ」(『女子大文学』第三二号)のようなものも含めての話だが、著書に類するもの三四点、論文に類するもの二〇六点。これを全部読み尽すことは全く不可能というほかはないのである。

中古文学関係の著書・論文がこれほどまでに大量に活字になっ